看工連携による精神保健看護教育の可能性
～拡張現実（AR）による統合失調症患者の患者体験教材の開発～

○田中　晴佳[1)]、角田　響介[1)]、尾山　匡浩[2)]、田原　熙昂[2)]、藤本　健司[2)]、坪井　桂子[1)]、小川　あい[1)]、神谷　訓康[1)]

1）神戸市看護大学、2）神戸市立工業高等専門学校

【背景】

近年、精神疾患の当事者がどのような体験をしているか仮想現実（Virtual Reality：VR）で疑似体験し、周囲の理解を深める取り組みがなされている。当事者の疑似体験を通して、症状のつらさ・恐怖・混乱を実感し、当事者の言動の意味や気持ちを理解することで、ケア時の言葉かけや非言語的なかかわり方の変容が期待できる。看護学生のほとんどが精神疾患を有する患者と関わった経験が少ないため、疑似体験によって事前にケアのあり方を考えることで、臨地実習での戸惑いを軽減できると考えられる。しかし、学生にとって疑似体験だけでは、その体験を看護実践に直接活かすことは難しい。そのため、初学者である看護学生の実践能力の向上には、拡張現実（Augmented Reality：AR）を用いたロールプレイングなどのシミュレーション教育が有効と考えられる。ARは、スマホカメラやAR眼鏡越しの現実の風景にデジタル情報を重ねる技術である。AR眼鏡を使用すると、VRとは違って人とのコミュニケーションなどが自然に行うことができ、かつ幻視・幻聴などの症状を現実の状況に合わせて生成することができる。患者役となった学生がAR眼鏡を着用して実際の症状を体験しながら、看護師役の学生とロールプレイングを行うことで、患者理解だけでなく看護実践や判断プロセスの習得につながる。また、患者役の疑似体験した情報と看護師役との関わりの記録を用いて振り返りをすることで、より深い学習効果が期待できる。

【目的】

神戸市看護大学と神戸市立工業高等専門学校は、ARによる統合失調症患者の患者体験教材を共同開発している。本ワークショップにおいては、共同開発の経緯や開発状況を示すとともに、実際の看護教育現場での効果的な活用方法の検討や今後の課題、看工連携による精神保健看護教育の発展の可能性について、参加者と意見交換を行うことを目的とする。

【内容】

ワークショップでは、共同開発に至った経緯や共同開発の概要、AR作成に必要な看護職側の準備、教材による侵襲性などの倫理的課題などの説明後に、工学の専門家によるVR・AR技術と実装に向けた課題の説明、試作品のデモストレーション、教育に活用可能性のある工学技術の紹介を行う。その後、参加者とARによる患者体験の効果的な活用方法、今後の課題などについて意見交換を行う。

個人情報の取り扱いを含む倫理的配慮として、参加者の名簿は、参加人数等の集計後に適切に破棄する。また、集計は個人が特定されないよう匿名化して行う。記録用にワークショップ風景の写真を撮影するが、撮影前に同意をとり同意が得られない方は撮影しない。また、同意が得られた場合も、顔が映らないように撮影する。意見交換の際には、あらゆる方の立場を尊重するようファシリテーションを行う。

本ワークショップ開催に際し、開示すべきCOIはありません。